

氷のような夜だった。

突き刺さるほどに冷たい風が吹いて、木々を揺らしてぞつとする響きをあげる。

痛々しいほどに眩い月の光が照らす、紅い館。血潮を思わせるような禍々しい彩りに身を包み、小高い丘に座して人間の街並みを見下ろしている。

そこには悪魔が棲んでいる。血濡れの屋敷はその恐ろしさの象徴で、月のある夜は人々に平穏な眠りは訪れない。

悪魔の領主、紅魔卿。この一帯を取める地位にある彼は、数年に一度、街から美しい処女をさらい、その血を吸う。毒牙にかけられた乙女は彼の眷属となり、その身は同種の悪魔と化してしまう。そして紅い館、紅魔館で血の饗宴を夜ごと繰り広げる。

吸血鬼。地上に巢食つたあらゆる悪魔の中でも、最強最悪の種族。夜を統べる闇の王。

人外の力と、永遠に等しい寿命を持ち、長きに渡って人々を支配し続けている紅魔卿は、人々には恐怖の存在であつたが、しかし同族の吸血鬼たちからは、取るに足らないものという評価を下されていた。

超人的な能力を持ちながら、人間の定めた領主などという地位に甘んじ、己の館にハーレムを作ることのみに喜びを感じている彼は、だから吸血鬼たちのコミュニティに名を連ねてはいるものの、そこで己の存在を主張するようなことはしなかつた。

人を襲う彼は、だが決して人々を血祭りにはせず、むしろ眷族たちが無秩序に街を襲うことを戒めていた。しかし己に刃向かう者には容赦しなかつた。対決を望む者には、その力量の差を見せつけ、絶望に打ちひしがれた表情を前に舌なめずりをし、一滴残らず血を吸い上げた。

紅魔卿を打ち倒す勇者は現れなかった。紅魔卿がそのつもりになれば、一夜にして街を焦土と化すことは容易だった。その破滅の予感に怯えながら、人々は吸血鬼を打倒する光景を夢にだけ見ていた。

彼らの夢の中に現れる勇者は、神の使わした天使であつたり、あるいは神の力を得、その化身となつた己自信であつたり、時には西の森に住む魔女であつた。

紅魔館と、人間の街を挟んで向かい合うその森には、常に雨が降つていた。遙か昔より、そこは迷いの森であり、奥深くに魔女が住むと伝えられていた。

しかし魔女たちは人間とも吸血鬼とも不可侵を守つていた。――ある一人の例外を除いて。

その魔女は、己のある目的のために紅魔卿に取り入つたのだ。いや、正しく言えば、紅魔卿は魔女の魅了の術に堕ちたのだつた。吸血鬼でない魔女は、同族の吸血淑女たちを差し置いて紅魔卿の寵愛を受け、そして尋常の方法で子を為した。

かくして、生まれながらの吸血鬼が誕生した。名をレミリア。領主の家に伝わる姓でなく、紅魔の子であるということから、スカレットという字を戴く。生れ落ちたその時から、レミリアは吸血鬼として一人前の能力を備え、父である紅魔卿をものぐさ倒的な魔力を秘めていた。彼女は人間の子供と同じ速度で成長する己の身体をもどかく思つていた。

レミリアは紅魔卿の眷族の女たちに溺愛されて育つた。幼いながらその悪魔としての格は父を凌いでいたし、何より魔女の傀儡となつた紅魔卿は既にその意思と、魔物たちを統べる力を失つていたので。今やこの一帯の魔族たちは全てレミリアの眷族となつていた。レミリアは父を軽蔑していた。プライドのというものを持ち合わせないその愚者が吸血鬼の同族であり、自身の父親であることを彼女は恥じた。

母親はレミリアについて無関心であつた。彼女はずつと部屋に籠りきりで、何かの研究をしていた。

レミリアはそんな母親の様子を見るたびに、一つの疑念を浮かべずにはいられなかった。

——私は一体何のために作られたのだろうか。

言われずとも分かる。自分があの魔女の研究の、何らかの過程において作られたただの実験材料なのだということは。

吸血鬼を魅了できるほどの高度な魔術と、莫大な魔力を持った魔女が、一体どれほど大それた研究をしているのか、彼女には推し量ることすら出来なかった。

生まれながらの吸血鬼は、本能と呼ぶには余りに広範かつ細緻な知識を持っていた。だが、魔法に関する知識は、教えられなければ備えられなかった。圧倒的な身体能力と、あらゆる悪魔を使役する能力を持つ彼女に、魔法は必要なかったからだ。

彼女は運命という道の姿を俯瞰したいと望んだ。だがわがままを口にしても、そんなことは誰にも叶えられなかった。だから自分で視るしかなかった。

種々の魔眼、邪眼の能力を持つ眼を凝らしても、己の行く末はなかなか見えてこなかった。しかし、それが虚しいこととは彼女には思えなかった。薄い霞が何重にもかかったその向こう側に、おぼろげながら何かの気配が窺えるのだ。

——あれは、多分私に近いもの。

彼女は最初、母のことだと思った。

魔女が何の目的で自分を作ったのかは分からないまま、いつしかレミリアは彼女と、ひいては父をその手でくびり殺そうと思っていた。

殺意を抱くに値する感情や感傷があつたわけではない。ただ、己の生まれた意味が何であれ、それに従うのは厭だ、というわがままじみた気持ちであった。

後数年して、彼女が秘めた力を存分に発揮できるようになれば、魔女も、その手に堕ちた吸血鬼の成れの果ても、レミリアの敵ではなくなる。

そして、彼女が生まれてから五年の歳月が経った。

今宵も、夜の闇は氷のように天地を突き刺していた。しかし、紅魔館の様相は普段とは異なっていた。

夜ごとの酒宴が放つ魔族の気配よりも、もっと濃く、ずっと紅い瘴気が漂っていた。

今夜は、生誕の宴。

私が生まれた時も、こんな盛大に祝ったのかしら。

レミリアは心の中で呟いて、しかし同時に、そんなわけはないと答えを出していた。

もう一人の吸血鬼。レミリアの妹。それが生まれるその時を、最も心待ちにしているのが、他ならない母である魔女だった。

——あの女は、私を生むときにはあんな喜ばしい顔をしていなかったに違いない。だから。

今夜生まれるものが、本命なのだろう。

何らかの魔術の研究の成果が、今宵実を結ぶのだ。

——生まれてくるものが、人の形をしているとは思えないわね。まあ、何でもいいわ。それが何であるか見極めて、次の瞬間には——

ぶち壊してやる。

それが何であれ。レミリアは既にその決心を固めていた。五歳の身体であっても、既に身体能力では紅魔卿を優に上回っている。まだ人間の血を吸い尽くすことは叶わず、血族を増やせないこの段階で紅魔卿を失うことは痛手であったが、しかし時は今しかなかった。どんな大魔法が発動しようと、それもろともあの魔女と紅魔卿を殺す。それが己の運命なのだ。

レミリアは自分の部屋で、その時を待った。魔女の部屋には、彼女と、出産の手伝いをする数人の女たち。紅魔卿は自分の部屋だろう。

レミリアの魔眼を覆う霞が、少しずつ晴れていく。いよいよそのときは近い。

膨大な、未曾有の魔力が突如として生まれた。

レミリアは、魔眼をそちらへ向ける。正体不明の大魔法は、まず魔女の存在を跡形も無く消滅させた。次いで、すぐ傍にいた吸血鬼たちを。レミリアには、その攻撃の正体が見えなかった。膨大な魔力の発生源は、しかしその力を直接振りかざしたのではなかった。

——不可視の攻撃魔法？ 制御できないで、自滅したというの？

大魔力が移動を始めた。それはどうやら、父の、紅魔脚の部屋へ向かっているらしかった。

——次は父を殺すのかしら？ なんだ、私が手を下すことなんて、何一つ……

なかったじゃない。そう呟こうとしたとき、レミリアは視た。一瞬にして彼女の魔眼を覆う全ての霞が晴れ、その先にある、彼女の運命の正体を。

レミリアの、日の光を知らない真つ白な頬が、更に青ざめていくように見えた。

——まさか、そんな。

レミリアは飛んだ。父の部屋へと。

——止めなければ、破壊を！

大魔力は既に父の部屋へ到達していた。追いついたレミリアは扉を吹き飛ばし、無数の蝙蝠をその魔力源へ向けて飛び立たせた。

蝙蝠が、大魔力を包み——やがて、その魔力は気配を消した。危険がなくなつたことを確認して、レミリアは部屋の奥へと歩を進めた。

その光景を見るのが怖かった。

王座に腰掛、新たな子の姿を待っていた紅魔脚は、その半身を失っていた。塵からでも蘇る生存能力を持つ吸血鬼の、その無くなつた部分は、完全に切り離されていて灰も残らず、再生する気配も見せなかった。それでも、紅魔脚は生きていた。生きてはいるが、もはやその身を自由に動かすことは叶わないであろう。そして傀儡の術をかけた魔女がいなくなつた今、心ももう彼の元には戻らない。

レミリアは、つい先ほどまで殺意を抱いていた父親の、その変貌振りを目の当たりにして、握った拳を戦慄わななかせた。少しの間、眼を閉じた。

そして、蝙蝠たちを下がらせて、その惨事を引き起こした魔法の正体を見た。

ぎつ、と、何かが欠けるような音が部屋に響いた。それはレミリアが歯を食いしばる音だった。

——なんとということだ。

レミリアは先ほどよりも大きく、全身を震わせた。

それは、赤子だった。人間と変わらない外見で生まれた、吸血鬼の娘。黄金の髪を持ち、その背中に、奇妙な翼が生えていた。到底翼には見えないのだが、レミリアの翼がついている場所と同じ位置にあるため、翼と呼ぶほか無かった。七色に輝く奇妙な物体をぶら下げた、硬く黒い翼。

赤子は、苦しい表情で、気を失っていた。

——私の、妹。

レミリアは泣いた。あらんばかりの大声で、紅い瘴気は無茶苦茶に、滅茶苦茶にばら撒いて、館から街へ、魔女の森へと届くほどに泣き喚いた。

その声に赤子は眼を覚まし、そしてこちらも泣き叫んだ。ようやく己の誕生を知ったかのように。

二つの泣き声が、共鳴して館中を駆け巡った。館に住まう全ての吸血鬼、悪魔、魔族たちがその声を聞き、精神を掻き乱した。子供の泣き声というものを解さない魔獣でさえ、その声を打ち消すかのように大声で吠えた。館中が得体の知れぬ嫌悪感に苛まれ、誕生祭は一転して阿鼻叫喚と化した。

レミリアの、己の運命を見ようとした魔眼の先にあったものは、この妹の姿だった。焦土と化した全世界の中心で、ただ独り笑い声を上げる妹の笑顔。

——これが、彼女の、私の、運命なら。私はそれを変えるために生涯をささげよう。

497年に及ぶ戦いが、この時始まったのだった。